
花街～ヒース～

近江駟琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花街〜ヒース〜

【Nコード】

N0277S

【作者名】

近江駆琉

【あらすじ】

『花街』。そこは『外』と隔離された歓楽街。その中で少々他と趣の異なった洋館がある。そこは男女両方を扱う高級娼館『スカーレット』。ヒースはそこで育ち、男娼となった。彼の過去とは

一花

「あっ…だめ、だめよ…ヒース。んあっ…」

婦人と言い表すのが最も似合いの女性が今日の客。

「だめ？…どうして…僕にされるの嫌？」

仕事なんだから相手を楽しませないといけない。俺は手を止めて言った。

「そうじゃないっ…感じすぎちゃうの。だから、やめないで…？」

「良かった…」

俺が再開すると彼女は甘えるように身体をすりよせてきた。

（かわいいなあ…女性って）

仕事の度に俺はそう思う。

「よっ！！お疲れ、ヒース」

「ん…？ああ、ユリウスか。そっちも終わったのか？」

さっきの婦人を車までエスコートして戻ってくると、同僚のユリウスが声をかけてきた。

「いや、俺はこれからさ。お前はもう終わり?。」

「今日はあと2人。じゃ、準備しなきゃだから…また」

「さすが売れっ子だな、頑張れよ」

俺は次の客を迎えるためにシャワーを浴びに私室に戻った。

部屋に戻るとすでに寝室は整えられていて、先ほどの情事がなかったことのようなのである。

（次の客が詰まってるんだっけ…急がないと）

俺は急いで汗を流して着替えた。

（次は…まりこさんか。じゃあこの間作ってくれたスーツにしよう）

俺はタイトなシルエットのブラックスーツに白のシャツ、黒のタイを身につけエントランスホールへと今日2度目の出迎えに行った。

二花

俺がいる娼館『スカーレット』は花街『露宮』の中でも高級娼館であり、中世のヨーロッパ風に造られた重厚な建物である。

娼館といってもここに居るのは娼婦だけではない。半分は男娼、年齢も17〜50歳に近い男娼までいる。

そのため訪れる客も様々であり男娼を買う男も娼婦を買う女もいる。

同性の客を受けない奴もいるが、俺の客は2対1で女性が多い。

今日の客3人も全員女性だった。

「あー…疲れた」

3人目を送り出してから俺はダイニングルームで机に突っ伏した。

「なっさけないなー、若いんだからもつと頑張りなさい！！まだ17歳なんだから1日に5人や6人位平気でしょう？」

頭の上で誰かが話していた。同僚の娼婦でたるアイラである。

「俺、もう18だし…若いとか若くないとかじゃなくて、これは向き不向きだよ。俺は3人が限界…アイラみたいにそんな人数を相手にできない」

「生意気ねー、本当に。そんなんじゃ、これ、渡さないわよ？」

顔を上げるとアイラが持っていたのは一通の白い封筒だった。

「…誰から？」

スカーレットでは自分の客や身内以外の『外』の人間との私的な連絡は出来ない。

そのために客に手紙を託すことで密かにやり取りをしたりしている。

「心当たりはあるでしょうか？用心深いわねー…大川様からお預かりしたのよ」

「りょーかい…ありがとう」

俺はアイラに仕事用の顔で微笑んだ。

「あーあ…無邪気な笑顔、あんたのお客様はその顔に騙されてるわ。疲れないの？」

「これも俺だよ、別に疲れたりはない。じゃあ、俺もっ寝るね。おやすみ…」

時刻は深夜2時。今日は早めに眠れそうだ。

三花

コンコン…

「う、ん…」

ノックの音で目を覚ました。

（…今、何時だ？）

俺たちの部屋は昼間でも仕事しやすいように厚いカーテンが掛かっているため、カーテンを閉めてしまうと明かりが入りにくい。

（5時半…寝よ）

非常識な時間なため、俺はノックを無視して再び枕に顔を埋めた。

ドンドン…！…ドンドンドン…！

そのとたんにノックというには荒っぽくドアが叩かれた。

仕方なく起きて寝室を出る。

（誰だよ、こんな中途半端な時間に…まさか誰かの客じゃないだろうな）

「はい、どなたですか？」

俺はドアを開けずに返事をした。

「こんな時間にすみません、警察の方がいらっしゃっていてヒースさんにお会いしたいということです。急いで管理室に来てください」
どうやらノックをしたのは館の職員のようなのだ。

「わかりました。１０分ほどお待ち頂きたいと伝えて下さい」

そう答えて俺は身支度にかかった。

（警察ねー、最近変わった客なんていたかな？ってかわざわざこんな時間に来なくてもいいだろ）

仕事から警察が聴取に来ることは珍しくないのだ。
管理室に行くかどうか呼び出されたのは俺だけじゃないようで、ユリウスにアイラ、他にも数人がいた。

「おはよう、ヒース。せっかく早く仕事が終わったのに残念ね」

言葉とは裏腹に嬉しそうな表情でアイラが言った。

「本当にね……」

そこに警察官が２人表れた。

「こんな時間にお呼び立てして申し訳ありません。実は昨夜未明に殺人事件がありました、その容疑者についてお話を聞きたいのです」

「つまり容疑者がうちの客ってこと？ってか逮捕はすんでんの？」

ユリウスが尋ねた。

「そうです。逮捕についてはまだで、現在搜索中です。容疑者は……」

話をまとめると、どうやら容疑者はユリウスの客だが呼び出された俺達とも面識のある男であり、居場所や動機についての情報を集めるに來たらしい。

「何かご存じではありませんか？」

（そんなこと言われてもな……ユリウス以外は親しくもないし）

案の定ユリウスも含めて皆特に思いあたるふしは無いようだった。

「残念ながら特にないですね。俺のところでもあまり話をする人じゃなかったし……」

代表するようにユリウスが答えた。

「そうですか……ご協力ありがとうございました。またなにか思い出したらご連絡下さい」

そう言って警察官は帰っていった。

「殺人ねえ……特に変わった客でもなかったし、そんなによく來たわけでもないからなあ」

ユリウスが言った。

「逮捕がまだって言うのが嫌だね。たまに勘違いな客がいるからさ」
俺が言うと周りも同意した。

花街は閉鎖的なために潜伏しやすい。その上に客のなかには『俺とお前のなかだろう？俺が逮捕されたら嫌だろう！？』などと言い出す勘違いな人間もいるのだ。

「確かにね…気をつけるよ」

「じゃあもう部屋に戻ってもいいかしらね？」

アイラのこの言葉をきっかけに解散となった。

結局この容疑者は1週間ほど後に逮捕されたと連絡がきた。

四花

「いらっしやいませ、優香さん。お待ちしてましたよ」

この日も俺はいつものように仕事をしていた。今日の客は常連のご婦人が2人、新規の客が間に1人含まれていた。

「ちょっと久しぶりになっちゃったわね。私に会いたかった、ヒース？」

「もちろんですよ、待っている間今日は何をしようかと考えてそわそわしてました」

女性の多くは雰囲気を大切にしながら求められる事が好きなため、深読みさせる言葉を選ぶ。

「クスクス…楽しみにしてるわ」

「ではお手をどうぞ。部屋に行きましょう」

外はまだまだ昼間の様子を呈している。

部屋につくと俺はアフタヌーンティーを用意して話を聞くことにした。

「ねえヒース？少し見ないうちに背が伸びた？」

「ええ。もうそろそろ打ち止めでしょうけどね…もう少し欲しかったなあ」

俺の身長は175cmほど。目標は180cmだがさすがにもう伸びないだろう。

「ヒースくらいが一番いいわよ、高めだけど、高くはないって所がね」

「そうかなあ…あと5cmくらい伸びたらいいのに」

「あと5cmあればキスする時に優香さんが背伸びしてくれそうなのにな…」

ぼそつと言うとなぜか優香さんはクスクス笑い出した。

「あらあら、そんな理由なら大丈夫よ？今だって背伸びしてあげるわ」

「じゃあしてよ。ほら、立つから」

俺が彼女の隣に立つと、彼女も立ち上がって俺の首に腕をまわしてきた。

「んっ…」

くちゅっ…ちゅっ…

ぬれた音をたてて深いキスをする。

優香さんが頑張って背伸びをしてくれていて、いつもよりかがまなくていい。

「うんっ…ヒース…苦しっ…」

しばらく深いキスを続けていたが優香さんが音をあげた。

「…っはぁ…ねえ、久しぶりすぎて足りないよ。…どうしてくれるの？」

俺は少し拗ねたように言った。

「もう…まだ明るいのに？でもいいわ、好きなだけあげる…」

そう囁きながら彼女は身体を刷り寄せてくる。

「ここでいいの？意外と刺激的なのが好きなんだね……貴女のきれいなところ、全部見せて…」

明るい居間で俺は彼女を抱いた。

まさかその光景を見られているとも思わずに。

五花

優香さんを見送ってすぐに新規の客を迎える準備をし始めた。
資料をみながら服装や話し方を考え、客の望むヒースを作っていくのだ。

（氷室あかね、氷室財閥のご令嬢ね。年は…18歳！？こんな年から花街に出入りか。しかも同年…やりにくそうだし面倒くさいな…）

若い女性の中には花街をホストクラブのように思っている者もいる。

「勘違いされないように一切プライベートは話さないようにしないとだな…服装は地味なスーツでいいか」

悩んだ末にどこにでもいるサラリーマンのような服装で出迎えに行った。

エントランスホールに着くと既に客はソファーに座っていた。

（早いな…まだ予約の時間まで20分もあるのに…）

そこへ受付の男がそつと声を掛けてきた。

「ヒースさん、あの女の子3時間位前から居たんですよ…外の庭園を歩いたりしてたのですが…1時間位前にあそこに座って。それに、すごく怒ってました…気をつけて下さい」

「うわー…前途多難だな。わかった」

俺は覚悟を決めてしつかりと営業用の笑顔を作って女の子に声をかけた。

「お待たせしてすみません。氷室あかね様ですね？僕がヒースです、スカーレットによろこ…」

「どうということよ！！！！」

俺が最後まで挨拶をする前に急に目の前の少女が叫んだ。

「あなたは私を待たせて何をやってたのかしら??」

「お待たせしたのは大変申し訳ありませんが、お約束の時刻は7時でしたよね?」

俺は彼女が怒っている理由がわからなかった。

「そんなの関係ないじゃないの！！あなたは私に買われたのよ!？
なのに…あんな品のないお婆さんと勝手にセックスして…
ねえ、どうということ！！！！」

（庭園から部屋を覗いてたのか？最悪だな…勘違いも甚だしい…）

彼女の様子から俺は顧客として認められないと判断した。

「どういふことと言われましても…申し訳ありませんが少々お待ち下さい」

俺は受付に事情を話に行こうと彼女に背を向けた。すると彼女は態

度を一変させ背中にしがみついてきた。

「うわっ…どうし…」

「やだ！行かないで…ねえ、怒ったの？ごめんなさい、謝るから行かないで！あなたが好きなの」

（くそっ…最悪以下だろ！！どんな教育してるんだよ…）

人の出入りが多い時間のエントランスホール、周りの人が横目でヒース達を見ていく。

「怒ってなどいません、ですから落ち着いてソファーに座って下さい」

再び優しくそうに見える笑顔を作って言った。とにかく受付に状況を伝えて早急に帰ってもらわなければならない。

「ねえ、本当に怒ってない？ねえ！！…」

ソファーには座らせたが彼女は俺の腕を掴んで離さない。

俺が困っていると館の職員が来るのが見えた。

（誰かが手配してくれたのか、助かった…）

職員が穩便に済まそうと話しかけるが彼女が騒ぎたてたため、残念ながら拘束されて連行されていった。

「ちょっと…！！なにするのよ！！離してっ…ヒース、助けて！！」

私に会いたかったわよね？私の事好きでしょ？…ねえ！！」

連れられていく彼女に俺はすぐに背を向け管理室に報告に行った。

こついう事もたまにはあるため、どうといつことでもない。

六花

「大変だったわね…大丈夫？」

俺が報告を終えて部屋を出るとアイラが廊下で待っていた。

「アイラが職員を呼んでくれたのか、ありがとう。助かったよ」

「どういたしまして。時間があるなら私の部屋でお茶でもどう？少し休んでいきなさい」

時間をみると次の客の予約まではまだしばらくあった。

「女性からの誘いを断るほど野暮じゃないよ、ぜひお邪魔させていただきます」

するとアイラも艶やかに微笑み返してきた。

「あら、女性ならどなたでもよろしいのかしら…？貴方だから誘いしたのよ」

「ではお手をどうぞ」

俺たちはふざけながら部屋へ行った。

部屋ではアイラが自ら暖かい紅茶を入れてくれた。

「なんだか懐かしいな、こうしてアイラの部屋で過ごすの…」

「そうね、あなたが小さな頃はよく遊びにきてくれていたから」

アイラがこの館に来たのは俺が9歳の時だった。アイラは既に18歳ですぐに客をとり始めていた。

「俺もあの頃のアイラと同じ歳になっちゃったよ。アイラみたいにはなれてないけどね…ま、あれだけ働いてたアイラが特殊なんだろうけど」

「あの頃はね…若かったから。あなたはあなたで大変みたいね？」

アイラは昔から俺を弟のように気にしてくれる。

「まあ、そうだね…毎日仕事が終わっててつらいよ。それに…今日みたいな新規の客が最近少くないんだ」

「この前モデルとして雑誌に載ったからね。あれで花街を知らない子が訪ねてきてるのよ」

この間客の一人にモデルを頼まれ、若い女性むけの雑誌の仕事をした。

そういつた仕事は基本的に禁止されているが、今回は大口の客からの頼みで断れなかったのだ。

「あーあ…もう絶対にしたくないよ」

しばらくアイラと話していたが、次の客の予約の時間が迫ってきた。

「じゃ、仕事に行くね。いつもありがとう、アイラ」

「いいえ、いつてらっしゃい。また時間があつたらおいでなさい」

俺がアイラの部屋をでると偶然シリウスに出会った。

「よお、アイラの部屋から出てくるとは…ずいぶんといい思いしてるな」

「嫉妬か？シリウス」

俺はにやつと笑って言った。シリウスはアイラが好きなのだ。

「なんの事だか…ま、せいぜい勘違い女に誘拐されないようにな」

シリウスはそう言つと去つていった。

「うっせ…だから気をつけて館に軟禁されてんだよ」

モデルをしたせいでストーカーにあっているのため、俺は外出禁止中なのだ。

部屋に戻つて地味なスーツから次の客のためにカジュアルな服に着替え、仕事モードに切り替える。

「さて、行くか…」

今日最後の客をいつも通り送り出す頃には、前の客の事など気にかけていなかった。

七花

「はい、私からのラブレターよ」

ある日の午前。俺がアイラの部屋を訪ねたとたん、不遜な態度で一枚の封筒を渡して寄越した。

「うわ…そんな態度で渡されても可愛いげの欠片も見いだせないよ。ありがとう、後でちゃんと読んで返事をすればいい？」

俺はその封筒を受け取ってそう返した。

「ええ、いい答えを待ってるわ。…ちやうどよく訪ねてきたから先に私の用事を済ませたけれど…あなたの用事は？ヒース」

「あのさ、ちよつとでいいから館の外に出たいんだよね。…アイラからオーナーに頼んでみてくれない？」

スカーレットの経営者及び管理者、オーナーと呼ばれる彼とアイラは仲がいいのだ。

「嫌よ」

きつぱりと即座にアイラは言った。

「…無理、じゃなくて嫌？」

「そう、私は今あなたを館の外に出す事に賛成できないもの。まだ

あなたの評判は消えてないし、ストーカーらしき子も報告が来てるでしょ？」

「でもっ…もう1ヶ月だよ？俺だって遊びに出たいんだよね」

花街にも映画館やカラオケなど娯楽施設がある。俺はどうしても最近公開された映画を見に行きたかったのだ。

俺が外出したい理由を言うとアイラはため息をついた。

「はー…まだまだお子様ね。自分の身体が商品、しかも高級品だって自覚してるの？」

とにかくだめ、もう1ヶ月位は我慢しなさい」

「あー…ストレス溜まるな」

俺は外出を諦めてソファーに体を埋めた。

「…少し休みを取ったらどう？毎日予約でいっぱいみたいだし、無理してるんじゃない？」

そんな俺にアイラが心配そうに言ってくれる。

「いや…仕事は休みたくないから。俺は少しでも早くこの街を出たいんだよ。わかってるだろ？」

「…まあ、頑張りなさい」

アイラはただそう言って俺の頭を優しく撫でた。

八花

今日の最後の客は優香さんだった。

「ん……ふぁっ……」

月明かりに照らされたベッドの上で彼女は艶やかな息を漏らしている。

ちゅっ……ちゅくっ……

生白い胸の先端を口に含み吸う。

「あん……もう、やめ……」

先ほどから俺は彼女の他の場所には一切触れずに薄く色付いた突起を責め立てている。

「……やめ……？ごめんね、優香さんが何を言いたいのがよくわかんないや……んっ……」

俺は口を離さないまま答えた。

「だ、から……はぁっ……もう、そこい……やぁぁぁー!!」

彼女が言い終える前に俺は一気に彼女の中に指を埋めた。

「優香さんのなか、ほんとに気持ちいい……」

「ヒース…うんんっ……」

少し身をよじって彼女は声を抑えている。

優香さんは基本的にいつもこうやって自分を抑えることが多く前回のように昼間、しかも寝室以外での行為はほとんどしない。

（やっぱり日頃大変なんだろうな…政治家の妻って）

「ねえ、優香さん？」

俺はそんな彼女に真摯な顔で囁いた。

ぐちゅっ…ぐちゅう…

囁きながらも指は彼女の中を蹂躪し続ける。

「んっ…なに、ヒース？」

「……酷くしたくなつた」

「えっ？…あっ！…ちよっ、ヒースっ…ん、あっ、ああっ…」

ぐちやつぐちゅう、じゅっ…

「はあっ…本当にいい声…壊したくなるよね…？」

俺は彼女の唇を深く犯しながら中を押し広げて自身を進めた。

「やあっ、あ…あああああっ！…」

九花

「けほっ…んー」

寝室で抱き合っでぐったりした彼女を俺はバスルームに運び、再び強引に抱いた。

声を出し過ぎたのだろう。先ほどからたまに咳をしている。

「…ごめん、優香さん。身体大丈夫？」

再び寝室に戻って寄り添うと、ゆっくりとした時間が流れる。

「…ちょっとつらい…」

「ごめんね？」

まだしめっている髪に指をからませると、すねたように払われてしまった。

「…ごめん」

「すっごく怒ってるわけじゃないわよ、ちょっといじめすぎちゃったかしら」

よほど情けない声だったのだろう。彼女はくすくすと笑い始めた。

「でも、どうしてあんなことしたの？」

「…言いたくないって言ったら？」

理由はもちろんあったし、自分の欲求のままに暴力的な行為ではなかった。

「そうね…言いたくない気持ちはわかるけれど、私としては聞きたいわねえ。…もし言わなかったらしばらくここには来ないわ」

「…声を抑えてる優香さんを見たら、いろいろ思った。それだけっ」

「いろいろって？聞きたくなるなあ…けほっ」

彼女はにこにこしながらわざとらしく咳きこんだ。

「…だからっ、僕のところにいる時くらいは、もっと自由にしたいなって！…僕に対してもバリアがあるんだって思ったら、壊したくなった。…そのバリアと、優香さん自身を…あー！！ほんつとに恥ずかしいっ！！」

「…ありがと、ヒース」

「…今日、まさかこれから帰るとか言わないでしょ？隣で眠ってよ」

「うん…おやすみなさい」

しばらくすると小さな寝息が聞こえてきた。俺は体を起して寝室を出る。彼女は一度寝てしまつとなかなか起きない。

「はあー…疲れたな」

厚いカーテンを開けると、濃紺の空に月が明るく輝いている。

「…ゆうか、悠華っ…」

実はさっき彼女に言ったことが今日の態度の全てではなかった。

午前中にアイラから受け取った手紙を読み返す。

「…はっ、ほんとに馬鹿なのは俺だよな…」

あいつと同じ名前で、何となく似たような態度をとる彼女に、俺は『ヒース』でいられなくなった。

彼女にとって俺という存在は何の障害もなく美しい羽を思い切り伸ばせる場所であって欲しいと思っていた。

あいつにとっても。

…

十花

「ヒース…？」

心地よいふわふわとした感覚のなか、俺を呼ぶ声がある。

「……」

優しい手が俺の顔に触れてくる。

（ああ、このまま時間が止まればいい…）

なんだか暖かくて、優しい…懐かしい夢を見ていたような気がする。
顔に触れていた手が離れていくのが嫌で、無意識に俺はその手をつかんだ。

「あら、起きちゃった？」

目を開けるとアイラが残念そうにしていた。

「今ブランケットを取りに行こうとしたところなのよ」

…そうだ、アイラの部屋に来ていたんだった。

「…ごめん」

俺が握っていたアイラの手を離して言うとアイラは優しく微笑んで

言った。

「何が？」

「…寝ちゃって」

とつさに一番それらしい嘘を吐いた。自分でもどうしてごめんなんて言ったのかわからなかった。

「ふふつ、本当にあなたは嘘がへたくそね。それでしっかり客が取れているのが不思議だわ」

アイラはそういうと俺が寝ていたソファを離れていく。

「はい、どうぞ。こんなところで寝て身体冷えたでしょ、あつたかいお茶でも飲みなさい」

「ありがとう…」

アイラの入れてくれたお茶を一口飲んでほっと息をつく。

「…最近、調子がよくないみたいね」

アイラのその言葉に俺はびくつとしてしまったが、それを隠して答えた。

「…それはどっちのこと？」

「両方よ。…特にあなたかしら」

「…ちよつとね、疲れてるんだ」

優香さんを抱いたあの日から1週間、ずっと俺は悩んでいた。

「あいつのことはもちろんだけど、仕事のほうでも本当にまいっちやうよ…毎日毎日…」

俺に付きまとっていたストーカーは減ったが、その分たちが悪くなっていた。

「ほかの客に迷惑かけるなんて…花街のルールをなんだと思ってるんだろうな」

「噂は聞いているけど大変ね…そんななかあなたに毎日客を取らせるオーナーはどうかと思うけれど」

怒ったようにアイラは言った。

「あの子の方はどう?」

「……………」

俺が答えないでいるとアイラは俺の頭をなでて言った。

「…すこし、仕事は休んでみる?あなたが望むなら私から頼んであげるわよ」

その言葉に俺は驚いてアイラの目を見つめた。

仕事には厳しいアイラがそう言うほどに今の俺は不安定なのだと気づいた。

「休んだら、意味がないんだ…」

「そんなこと言わないの。せめて今日だけでも休みなさい。いい？」

「…アイラは？」

「私はもともと今日は休むつもりだったのよ。ゆっくりしていきなさい」

そう言ってアイラはオーナーの部屋へ電話をかけに行った。

(…アイラが今日ちょうど休みなんて、そんなわけないのに)

俺はアイラの言葉に甘えて、少し冷めてしまったお茶を飲んだ。

十一花

その日は結局1日ずっとアイラの部屋で過ごした。

「ねえ、泊まってもいい？」

このまま一人で眠りたくなくて俺はアイラに頼んだ。

「いいわよ、別に。あなたと眠るのなんて本当に久しぶりね」

「そりゃそうだろ、俺だって思春期ってやつがあっただんだから」

俺が客を取り始める少し前、アイラといえることは苦痛になった。

別にアイラに恋心を抱いていたわけではないが、弟のように変わらず接してくるアイラの行為に素直に甘えられる様な時期ではなく、一緒に過ごす時間は減った。

もちろん売れっ子のアイラの夜があいていることが少なかったせいもあるのだが。

アイラのベッドで隣に横になると、アイラは俺の髪に指を絡ませてきた。

「…ねえ、昼間ソファで眠っていた時、あなた泣いてたわよ」

「…どうしてだろうね？」

俺がなんでもないように答えるとアイラは困ったように微笑んだ。

「あーあ…どうして私のかわいい弟くんはこんなにかっこいい男になっちゃったんでしょうね？ぜーんぶ自分で抱え込んで、誰にも頼らなくて」

「ずっと、素晴らしいお姉さんを身近で見えてきたからね」

俺が微笑んで答える。

「…そんなこと言って。あなたがもつとダメ男になるように振る舞えばよかったわ」

そう言つてくすくすと笑いだした。

「…ね、アイラ」

「ん…なあに？」

「…ありがとう」

「…ほんとに大人になったのね、少しさみしいわ」

俺は疲れていたこともあり、話しながらも瞼が重くなってきた。

「…と、思ったけどやっぱりまだお子様かしら？我慢しないで寝ちゃいなさい」

うつうつとする俺をみてアイラは微笑みながら寝かしつけるように頭を撫でる。

「うん、おやすみ。アイラ…」

そんな心地よさに包まれて俺は眠りについた。

翌朝あんな事が起きるとも思わずに…

十二花

「…なさい!」

「…は?部屋に…いな…ぞ!」

廊下の騒ぎで俺が目を覚ますとすでにアイラはいなかった。時計を見ると9時…そろそろ昨日の泊まりの客が帰り、一番静かな時間のはずである。

「おはよう、ずいぶん騒がしいけど…何かあったの?」

リビングへ行くとアイラは緊張した様子で電話をしていた。

「おはよう、今起こしに行こうと思っていたのよ。はい、オーナーからよ」

そう言つて俺に受話器を差し出してきた。

「俺に?」

わざわざアイラの部屋にまでかけてくるなんて、何の用事だろうと思ひながら俺は受け取った。

「はい、ヒースです。おはようございます」

『ああ、おはよう…館の中が騒がしいのはわかってるな?』

「ええ、もちろん…何か俺にかかわることですか?」

こんな騒ぎを起こすような客に覚えはないが、オーナーの話しぶりからして俺がらみのようだ。

『実はさつき受付に氷室財閥のお嬢さんがきてな…お前に会いたいと言っんだ。もちろん断ったんだが、すると妙な事を大声で言い出した』

「はあ…」

俺はその子の顔を思い出そうとしたが、思い出せなかった。

『お前がこの館に監禁されている、と言いだしたんだ』

「へー…よく知ってますね、その子。実際、もう1か月以上は監禁状態ですもんね」

『真面目に聞け。…で、警備員の制止を振り切って館内をお前を助け出すために走り回っているんだ。一応氷室財閥のお嬢さんだからあんまり手荒なまねもできなくてな…というわけだから、部屋から出るなよ！…ドアにも…一応窓にも鍵をかけてカーテンも閉めておけ。わかったか？』

「はいはい、りょーかいです」

俺が電話を切る頃にはアイラがしっかりと鍵や、カーテンを閉めていた。

「あーあ…せつかく今日から頑張ろうって思った矢先にこれかよ…」

相変わらず廊下からはバタバタと足音が聞こえたりしている。

「本当に災難ね。どんなお客さんだったの？」

心配そうにアイラが尋ねてきた。

「客じゃないし…顔も思い出せないよ。勘違いしたただの女の子」

「…早く捕まえて欲しいわね。この部屋には入れないから大丈夫だとは思っけど…」

「そうだね…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0277s/>

花街～ヒース～

2011年8月16日23時21分発行